

牧会カウンセリングの方法に関する一試論

——特に回心過程との関係から——

小助川 次雄

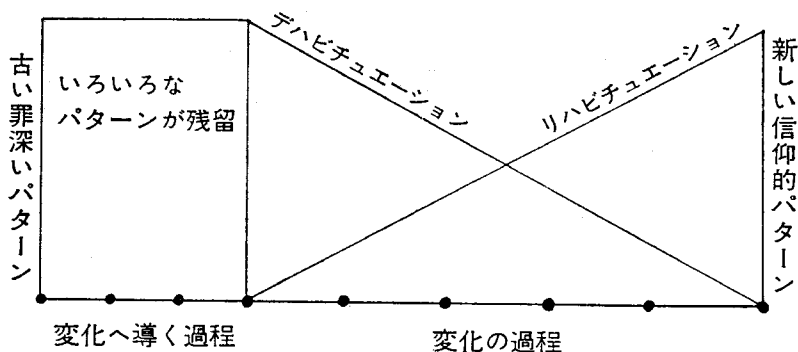
先に著者は、福音主義的立場からの牧会カウンセリングの定義について一つの提案をした。それによれば、「牧会カウンセリングとは、神のことばと聖霊の指導の下に、牧会および同じ配慮をする立場の者が、信徒や求道者その他の人々が、広義あるいは狭義のなんらかの意味で信仰生活に関して持っている、いろいろな種類の問題を解決するにあたり、多少なりとも特別な仕方を持つ相談関係である。」^①そして、同時にこの定義の内容とするところを説明した。本論文においては、その理解に立ちつつ、牧会におけるカウンセリングの実際的方法に関して、特に回心（入信）過程との関係から一つの試論を提示し、御批判と御指導を仰ぎたい。

一 予備的考察

ここでは、カウンセリングに伴う「二重の過程」について考えておきたい。

カウンセリングの方法の考察は、その「過程」と切り離して進めることは不可能である。また、「過程」というこ

悔い改めの時点—変化の始まり



全体で8-12週間期のカウンセリング・セッション

に思われる。

たとえば、C・M・ナラモアは、現代の心理学的理解としてもっとも常識的立場に立ってカウンセリングの定義を述べている。「あなたは人々を引き寄せ、そして彼らが自分の問題を論議し、解放(感)を経験し、物事をよく考え、いろいろなアイディアをより分け、考えることを明確にし、新しい洞察を得、さまざまな衝動を克服し、主に信頼して、よく適応するようになるよう助けることができるのです。」この定義的な説明は、福音主義的信仰に立つナラモアが、現代の心理学的常識によってインテグレイドしたものであると言えよう。

また、最近我が国においても紹介され、注目されているもう一つの福音派の考え方は、J・E・アダムスのものである。アダムスの中心的概念は、「ヌーセティック・カウンセリング」ということであるが、その過程の捉え方については、「神の群を牧するシリーズ・2」牧会カウンセリング^⑥の中で図示されている。この捉え方を、本著者は任意に「ハビチュエーション・セオリー」と呼ぶことにする。

アダムスによれば、変化の過程は、デハビチュエーションとリハ

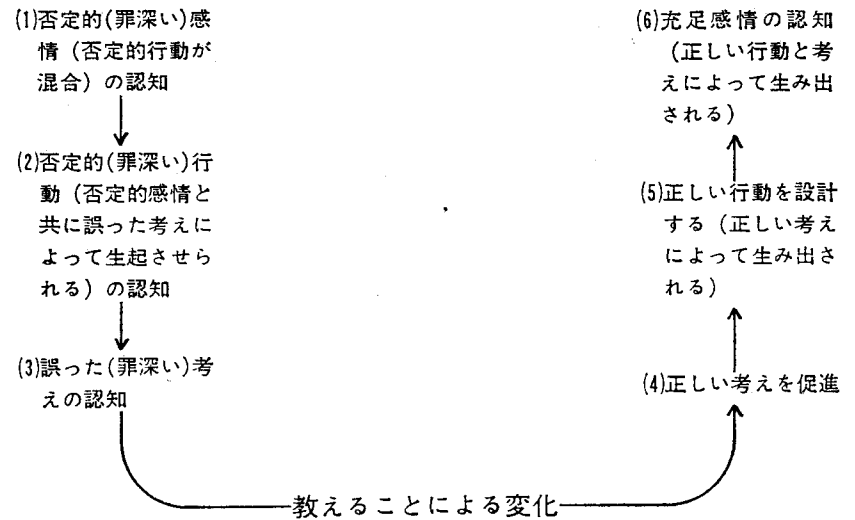
びを考慮する場合でも、それが二重にあることを忘れてはならない。一つは、来談者の側の過程であり、もう一つは、カウンセリングそのものの過程である。さらに考え方によっては、カウンセラー自身の側の過程も存在していると思われる。そして、二つまたは三つの別々の過程として存在しているわけではなく、ほとんど同時に重なり合っているため、無意識的に混同してしまうことが多い。ここでは、「二重の過程」と表現して、前二者を考慮ことにする。

(1) カウンセリングそのものの過程については、一般にその理論的立場によって多少の相違がある。ウイリアムソンらによれば、臨床的カウンセリングの過程は六段階に分けて考えられている。①分析、②総合、③診断、④予診(知)、⑤カウンセリング(治療)、⑥フォローアップである。

また、ロジャーズらによれば、非指示的カウンセリングの過程には、十二の段階があることは先にも述べた。論旨の関係上今一度、一部を取り上げておくことにする。①個人が助力を求めてやってくる。②助力を与えるという関係がはっきり示される。③クライエントの感情を自由に表現させる。④カウンセラーは、クライエントによって表現された否定的感情を受容し、認め、またはそれを明らかにしてやる。⑤この否定的な感情が十分に表現されると、一時的ながらも、かすかな肯定的感情が表現され、これが成長への踏石となる。⑥④と全く同じ態度で、この肯定的感情を認め、受容する(是認や賞讃ではない)。⑦この洞察、自己理解、自己受容は全過程において、二番目に重要である。……以下十二の段階までである。

以上のような考え方には、それぞれに理論的背景を持っているわけであるが、ここでは言及することが許されない。

(2) クリスチャン・カウンセラーが、カウンセリングの過程について述べるときも、やはり「二重の過程」について考えなければならないわけであるが、特に来談者に起る変化を観察するという面が強調されていることが多いように



ビジュアル・セッションの相反的生起によって理解されると言う。デハビチュエーションとは、古い罪深い(生活)・パターンの習熟性を脱することであり、リハビチュエーションとは新しい信仰的(生活)・パターンへ再習熟することのようである。この記述は、全般的な変容の図式としてはよく理解できるものと言えよう。

さらに我が国においては未だあまり知られていないと思われるが、L・J・クラブ・Jr.のエイアル・ヴィュー(Aerial View)も示唆に富むものとして取り上げられよう。

クラブは、上図のような、来談者の変化の過程を提示している。そして、この模図における重大なステップは、来談者の考えを変えること、来談者の心(mind)を更新するjyaであると言われている。なお、この三つの説明のほかにもW・E・オート、S・ヒルトナーなど、我が国の教会カウンセリング界においては、より一層よく知られているものも多くあることは言うまでもない。ただ、後二者の主要著作には、図式化の試みがないために、前三者の説を取り上げただけである。

前三者、すなわち、ナラモア、アダムス、およびクラブの説明は、多少立場を異にし、内容も異にしている点がある。ここでそれ

らの比較検討をする余裕はないが、本論文の著者の「理解」を示し、その立場を要約しておきたい。

C・M・ナラモアは、現代心理学の知見として常識になっている——特に(新)精神分析的人間理解を受容し、聖書的人間観に立ちつつも、その実際の行動の理解にそれらの知見を応用している。極めて現代的理解であると思われる。神学的枠組はないわけではないが、それは「従」である。J・E・アダムスは、出発点を神学的理解におき、現代の一般となっているカウンセリングの知見を否定しつつ、「ヌーセティック」という聖書用語を基礎としている。しかし、その理論的展開の中においては、しばしば、今日一般化されている「心理学的」知見と同一と思われる論理がある。L・J・クラブ・Jr.は、アダムスの行き過ぎと片寄りを指摘しつつ、聖書のカウンセリングの基本的原則を論じている。そこには、アダムスの「ヌーセティック」に通じるものがあると言えよう。それは、神学的枠組を優先させているところから来ている。しかし、カウンセリング過程における人間とその問題の理解については、クラブは、現代心理学の知見の価値を認め、適用している点アダムスと異なるところであるように思われる。

(3) 本著者の立場は、冒頭に記した教会カウンセリングの定義にもあるように、枠組はやはり聖書神学的な理解を前提かつ優先し、個々の心的現象の理解と指導にあたっては、現代心理学的知見を正しく適用することを是とするものである。この点、クラブの立場が一番近いように思われる。しかし、前三者も、実際に展開しているカウンセリングの内容においては、全く相容れない程に異質的なものであるとは思われない。神学的意識からの主張の相違程には、その実践的内容は違っていきなると考えるものである。そこで著者は、右に述べた立場になって、特に回心の進行過程に対応したカウンセリングの方法と内容について考察を試みるものである。

二 回心の過程の三段階^⑧

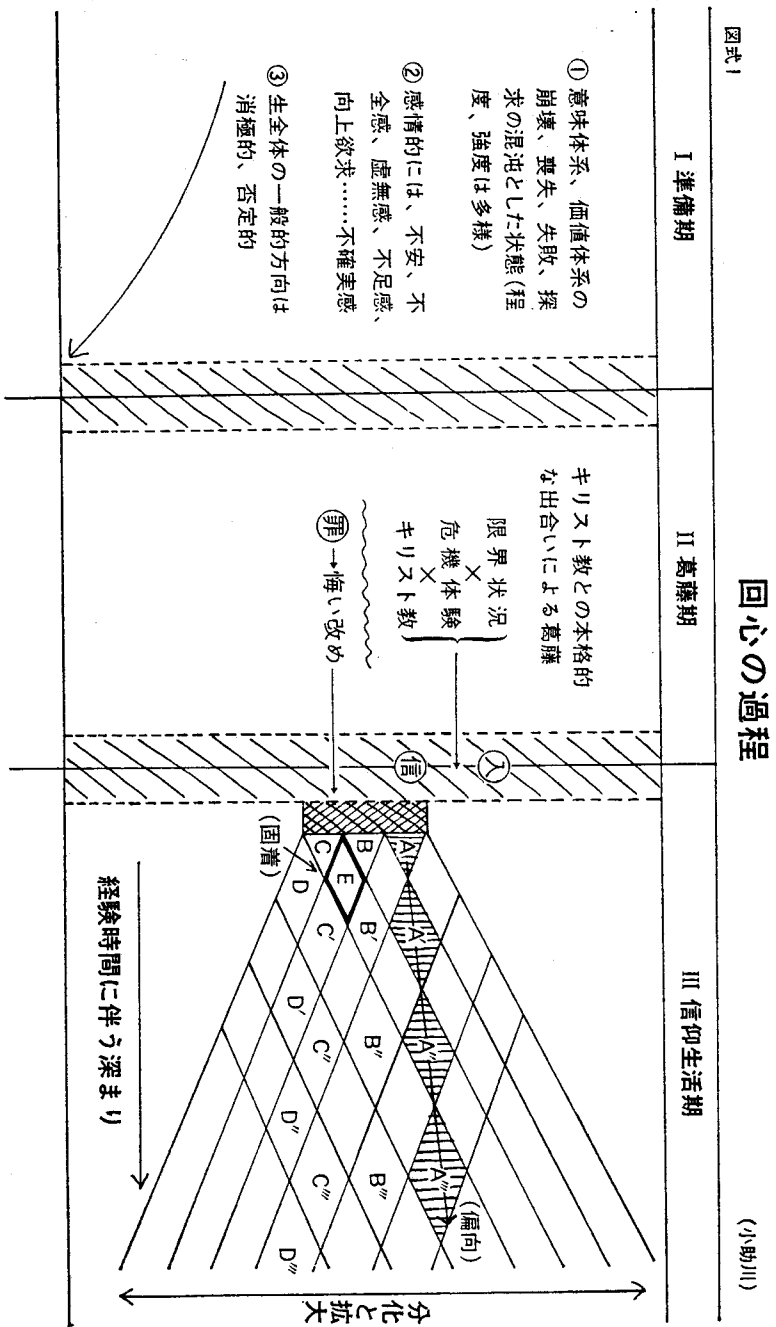
人の回心——神に対しては罪を悔い改め、主イエス・キリストに対して信仰を抱くこと(使行二〇・二二)——は、いかなる人間的なわざにもよらず、ただ主なる神の一方的なあわれみ、聖霊とみことばに依ることは、今さら言うまでもないことである。しかし、それにもかかわらず、パウロが、このことを、「ユダヤ人にもギリシヤ人にも……主張した」ように、神は救われた人を用いてそのあわれみのみわざをなされるのが普通である。それゆえにこそ、「カウンセリング」という人間の側の配慮ある営みも必要となっているわけである。

その回心の過程について考えるとき、そのすべては、特にその奥義については、神学も心理学も解明し得ないものがある。イエス・キリストは、ニコデモに対して、そのことを、風の例によって示唆を与えられた。しかし同時に、「悔い改めて福音を信じなさい」とも宣言伝えられたのである。ここで語りかけられている人に、その人がしなければならぬことがある。それは、「悔い改め」と「信じること」である。

ところが、現実には、この二つのことは、そう簡単には、その人のうちに起こらない。実際の手記や聖書記事が示すところによれば、少なくとも、三つの段階が考えられる。そして、その各々の段階には、各々の内容と特色がある。その主要なものを含めて、全体的枠組を図示したものが、図一である。

(1) 第一段階Ⅱ準備期

この時期では、その個人にとっては、一般的に言われる宗教的意識は必ずしも自覚的なものではない。ましてや、



具体的な信仰意識は、ほとんどない状態であると考えられる。そういうわけで、その個人は、受動的に、しかも、多くの場合は無意識的に準備がなされている段階である。従って、本人にとっては、この時期のことは、反省的、回顧的にしか考察されない場合が多いのである。

①この時期における個人の心的特徴をいくつか挙げてみたい。

(イ)自分の人生、生活、職業、交際、人間関係、その他の一つ、またはいくつかのことについて、「何のためにしているのか」という「意味づけ」や「価値づけ」に失敗していることが多い。「意味づけ」の崩壊、喪失、失敗、そして、探求という混乱した繰返しがなされている。それまでの「生活構造」を支える価値体系が崩壊しつつある。

(ロ)感情的には、不安、不全感、虚無感、不足感、向上欲求、何かを求めたくなる気持が錯綜している。

(ハ)その個人の人生全体の一般的方向は、消極的、否定的な場合が多い。

(ニ)従って、行動は、不確実感、焦燥感が伴ったり、一時的な気晴らしの、一貫性を欠いたものが多い。

以上の特色をよく表わしている手記を紹介しておこう。

ケース・1、「私は教会に行くようになる前は、受験に失敗した兄に対する父のきびしさ、そのことによる自分の夢の破壊、また、この世に対する疑問ばかりで、心の中に平安がありませんでした。』どうして人間は生きて行かなければならないのか。必ず誰でも肉体の死を味わわなければならないのに、いっそのこと、最初から生まれなければよかつたのに』と、このような考え方を何かにつけて思いめぐらしていました。……」

ケース・2、「……学生生活が楽しくて夢中で過ごしていました。しかし、大学に進学して、新しい友を得ました

が、今までのような友情ではありませんでした。友だちとの間がうまく行かず、毎日がとても耐えがたく思いました。友との真の交わりがありませんでしたので、私の心は非常に悲しく、また孤独を感じました。その心はさびしさと孤独と絶望でみたされ、全くみじめな気持を味わいました。そして小説を読んだり、映画を見たりなどしました。が、現実に立ち返った時のみじめさは、一層ひどいものでした。……」

(2) 第二段階Ⅱ葛藤期

さて、右のような準備期にあった者が、ある人は時間的経過に伴い、またある人は経験していることの強さに伴って、具体的に何かを求めようとして聖書を読み始めたり、あるいは、教会に出席したり、教会の外部で持たれている集会へ出席したりするようになる。言うまでもなく、それは自然に、必然的にそのようになるというわけではない。友人の誘い、トラクトの配布、特別な集会の案内、ラジオの放送……その他多くの方法の一つまたは二つ以上の、直接または間接の誘因によっているわけである。神が用いられている方法によってきっかけを与えられているわけである。そして、いろいろな意味の心的葛藤の段階にはいつて行くのである。

この時期も、二つの小段階に分けて考えることが便利である(操作的区分である)。

①探求や模索が宗教的志向へ向かうまでの過程。

この時期は、右に述べたキリスト教と接触するまでの過程である。そしてそれまでの人生観や物の考え方(価値観)以外のものを求めようとしながらも、先入観となつて宗教観や一般的価値観との葛藤を経験していることが多いのである。

②キリスト教との具体的な関係が生じたために葛藤の起る過程である。たとえば、聖書を読んで、「はじめに神は

天と地とを創造された。」(創世記一・一)を読んで、神なんているもんか……と自問したり、今の科学の時代に、天地の創造なんてバカらしい……と考えたり、「すべての人は罪を犯したので……」(ローマ三・二三)を読んで、オレは罪を犯してなんかいない……と反問したりする状態である。そして、こういう中で自己の限界を知り、危機的体験をし、霊的開眼をさせられている。言うまでもなく、自然にそうなるのか、人間の能力でそうなるのか言っているのではない。ここで述べていることは、因果関係の説明ではなく、信仰者の経験(心的現象)を追体験的に記述しているものである。

この過程を一つの図式で表わすことを試みると次のようになると考えられる。

限界意識×危機体験×キリスト教との出会い——葛藤……↓霊的直観↓回心(入信)

この場合の限界意識(経験)の主要なものは、時間的(長さ)な限界(一例は、死が近いのではないかという意識)、空間的な限界(たとえば、宇宙の広大さに圧倒されるような例)、能力的な限界、それに、道徳的な限界(たとえば自分の偽善や邪悪さに気づいて限界を感じる)などが挙げられる。

そして、危機体験とは、それまで支配的であった価値体系、生活の支えの論理と実質がその力を失い、不安、時には恐怖心に襲われて、このままではいけない、なんとかしなければ……という焦燥の中で求道することである。ただし、この体験も葛藤も、いつも大事件の中で起るというものではない。極めて小さな出来事の中でも起りうることを忘れてはならない。次の例は、この第二段階の経験の典型的なものであろう。

ケース・3、「……そのような精神的状況のうちに、現実の生活はさまざまな変化があり、Aの問題、Bの問題等、私にとってはどうすることもできない、いやなことや悲しいことが起ったが、特別路頭に迷うとかいうこともなく生活は続いた。肉親の本格的な仕事が始まると、私はその仕事にほとんど縛られるようになった。忙しい生活と、空虚さと、不安、そしてさまざまな闘いに疲れ果て、自分自身をさえ、時々信じられなくなり、何か絶対的に正しい道なんだというものが欲しいと思いました。そして、何かそのようなものが存在するような気がしました。そして、もしかしたら宗教という存在がその為にあるのかもしれないと思いました。……」

しかし、このケースの場合、教会に長く参加しながらも、回心の明確な経験はなかったのである。しかし、それが、愛する肉親の問題で無力の経験(能力の限界)に烈しくつき当り、それによって「砕かれる」のである。手記の後半は、次のように続いている。

「しかし高慢でかたくなな私の心の中には、この道は絶対正しい真理の道かもしれない……しかし人間の力だけの、他の道があるいはあるかもしれないという思いが残っていて、信仰生活の中に飛び込むことができませんでした。……しかし、私のひとりの肉親の病気は、だんだん悪化し、自分の力をふりしぼってもどうにもならず、愛は消えて行きました。私の愛も、誠意も、知識も、全く無力でした。私は本当に自分の無力さを知らされました。……神の前に、かたくなな心を砕かれて、私は泣きながら神の助けを求めました。……」

なお、内容的には前後しているのかもしれないが、次のように続いている。これは、日本人の心情をよく表わしている部分でもあると言えよう。

「宗教に関しては何も知らない私は、仏教は日本の宗教で、キリスト教は外国の宗教だと思っておりました。だからまず仏教を求めて見ようと思いましたが……。しかし、教会を考えたとき、その戸はいつも開かれ、老若男女を問

わず集まっている。その中に何かあるのかもしれない、教会へ行って見ようかな……と思い始めました。……」この例は、極めてインテリジェントな求道の例である。すべての求道者の第二段階が同様に明確なものとは言えないわけであるが、その強弱の違いはあっても、その個人にとっては、なんらかの意味で「危機体験」なのである。

ケース・4、「そして自分がいやになった。家庭にあり、自分の位置が、虫のようにいやになり、自然と空虚な思いに沈みがちになっていた。……ある時教会にさそわれた。宗教に行くのは逃避的だと思いましたが、だから信ずるなどとは思って行かなかった。いつも連れて行く人に、『ただ遊びについていくのよ』と言っていた。……(しかし、神は私を選んでくれた。……)」

これは若い人の手記の一部である。宗教を逃避的とするのは、今日の一般の宗教観である。しかし、そのような考へでは満足せず、より十分と思われるものを求めていた。さそわれて、やや否定的感情で出席していたようであるが、やはり、一般的宗教観を越えて行動している。そこには、弱い葛藤意識があったに違いない。

以上の二例は、いずれも、この葛藤期を神のあわれみによって導かれて、第三の段階にはいつて行った。しかし、この回心ができないままに、なおこの段階にとどまっている人たちもまことに多いのである。

また、R・ファームは、同じく福音主義的立場に立って、回心の過程を次のような年代的段階 (chronological steps) として記述していることを付言しておきたい。^①

①既に作られている思想のパターンを事件や環境が崩壊させる。

②何かの訴えや要求に個人が遭遇する。

③福音の核心を把握する。

④危機の瞬間が生じる。

⑤結果的産物が見られる。

ファームの理解は、本著者の考え方に類似しているものとして付記したわけである。ただ③福音の核心の把握と④危機の瞬間の生起の順序とその内容については、必ずしも著者の意味するところと同じではない。

なお、この段階に関連して最後に残る問題は、回心の信びよう性の問題である。しかし本稿の範囲を越えるために別の機会に譲る。

(3) 第三段階Ⅱ 信仰生活期

回心して入信した者は、この第三段階にはいることになる。一言で言えば、信仰生活の生涯全体がこの時期に該当することになる。

信仰者は、教会に所属し、聖書の教えや諸規則等の下で生活を営む。そして、新しく発見した人生の意味、喜びの感情をもって、肯定的、積極的な生き方をするようになる。そして、入信時には、一つか二つの中心的な問題意識をもっていたことにも解決を見出している。

しかし、入信後、いわゆる問題は何も無いというわけではない。ただ、いろいろな出来事は、結論的に言えば、信仰生活を逆説的に強化し、深め、建設的な多様性へのモメントとなる。あらゆる生活場面において、何らかの意味(または形)において、神とのかかわりが意識され、また、それを土台にして成長し、発展して行くのである。少な

くともこのことは、神学的（信仰的）論理についての理想である。図1の第三段階は、その過程を構造的に捉えて図式化を試みたものである。

①信仰生活の時間的経過と共に起ると考えられることは、信仰の普遍化（拡大化とも言えよう）ということである。これは、その個人の生活のすべての領域のすべての出来事に「神に対する信仰」の関係の中で理解されるようになることである。

時々言われるように、「信仰は信仰、仕事は仕事、それは別次元のことである」というような考えではなく、仕事も信仰との関係で理解されて行くことである。家庭も、結婚も、社会、学び……すべてについて神との関係の中に意味づけ、位置づけて行くようになる。

②同じく次に考えられることは、信仰の分化ということである。たとえば、初期の頃は単純に、盲目的に近い程の信じ方をしていることが多いわけであるが、信仰生活の時間的経過は、次第にそのことの困難さを知らせるようになる。そこで、神を信じるということ、人を信じるということの違い、愛するということの中のやさしさとときびしさ、霊的な理想と現実への対処……救われるために求められている信仰と、わざを成就するための信仰などについて、進んだ理解と経験をするようになる。

あえて教理的な表現をすれば、一例としてジェイコブスの分類を挙げることでもできよう。(1)主観的信仰と客観的信仰、(2)人間的信仰と神的信仰、(3)直接的なものと、全般的なもの、(4)行為としての信仰と、習慣としての信仰、(5)明瞭なものと不明瞭なもの、(6)未熟な信仰と愛によって働く信仰など。

③さらに、信仰の深化ということが考えられる。それは、同じ愛という経験でも、表面的な表現から、いのちをかける表現までするように、表面的、形式的信じ方から、犠牲を払ってでも信じ抜くという信仰へと進む。これを「深化」と呼ぶことにする。

④もう一つの期待されることは、信仰の強化ということである。信仰の「強さ」「弱さ」をどのように定義するかという問題があるけれども、とにかくパウロも「あなたがたは信仰の弱い人を受け入れなさい」(ローマ十四・一)と述べていることから、この期待は当然のことである。ただ注意しなければならぬことは、「強化」はそれ自体で考えられるというよりも、拡大化、分化、それに深化という過程とともにあり、ある意味ではそれらの結果的な「実」であるとも言えることができる。従って、ただ「強くなりなさい」と叫ぶだけでは不十分と言わなければならない。

さて、このような第三段階の時期の理解は実は全く聖書の教えているところによる。

「こういうわけで、私たちは……絶えずあなたがたのために祈り求めています。どうか、あなたがたがあらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころに関する真の知識に満たされますように。また、主になかった歩みをして、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる善行のうちに実を結び、神を知る知識を増し加えられますように。また、神の栄光ある権能に従い、あらゆる力をもって強くされて、忍耐と寛容を尽くし、また、光の中にある、聖徒の相続分にあずかる資格を私たちに与えてくださったさった父なる神に、喜びをもって感謝をささげることが出来ますように。」(コロサイ一・九—十二)

これは、パウロが、コロサイの教会の信徒の一層の成長のために祈られた言葉である。まことに見事に信徒の成長の神学的枠組を提示していると言いうことができる内容である。ここには、信仰の拡大、分化、深化、強化のすべての面が含まれていると言えよう。

しかし、問題は、これらのいずれの点においても、自然に、あるいは、必然的に進むわけではないところにある。このことは、準備期、葛藤期、信仰生活期のすべての段階にある問題点なのである。そして、これらの「必然的に進まない」諸状況と、その中にある個人の指導にあたることに「カウンセリング」が成立するのであり、「みことば」と聖霊の指導の下に「行なうことが」、「教会カウンセリング」であると考えられるのである。

三 各段階に即応したカウンセリングの試み

さて、カウンセリングそのものの方法や過程及び領域（範疇）などについて考察することになるわけであるが、もとよりその全体を取り上げることは、本稿の範囲の許すところではない。いくつかの点に限らざるをえない。

ただそのいくつかの主要点を考える前に、一つのことについて注意しておきたいと思う。それは、カウンセリングの方法とやるときに、それを、いわゆる小手先の意味でのテクニックと考えることについてである。それは、カウンセリングについての正しい理解ではない。そのような誤解を回避するために、先には「教会カウンセリングの聖書的基礎」を著わし、また本稿においても、あえて神学的枠組を論ずることに努力したのである。そして、すべてのカウンセリングは、各セッション（面談）についても、そのカウンセリングの全体（開始から終結まで）についても、聖書神学的枠組の中で進められ、その過程は、「特別な仕方」でなされるものでなければならないと考えるものである。なお、この場合の神学的枠組とは、偏狭な、個人的な考えであってはならないことは言うまでもない。

(一) 第一段階（準備期）のカウンセリングはいわば「伝道」カウンセリングである。

この段階も、その個人の意識の程度に応じて、論理的には、さらに二つの時期に小区分をすることができると思われる。それは来談者が、求道的意識をほとんど持っていない期間で、全くと言ってよい程に受動的な状態である。従って、厳密には来談者とか、求道者と呼ばれるような段階ではない。しかし、その個人もやがて意識的に、より積極的に関心を持つようになることが期待される。また、そのように導くことがこの段階の（伝道）カウンセリングの目的とするところではなければならない。

第一段階（準備期）全体としてのカウンセリングの目的は、第二段階へとその個人が志向するように助けることである。しかも、その場合、カウンセラーは意図的にその方向づけをするのであって、一般カウンセリングで説かれるように、そのような志向自体をカウンセラーに全くゆだねているものではない。この点、一般カウンセリングと異なるところである。もちろん、そのような方向づけは、強要されるものではないが、生れながらの人間は神の御霊に属することを受け入れない（コリント第一、二・十四）し、聞いたことのない方を信じることもできない（ローマ一〇・十）のであるから、カウンセラーは、意図的に、来談者に求道の方向づけを指導することになる。

しかし、この場合、カウンセラーは、たとえば、功を焦って先を急ぐことのないようにする注意が必要である。この時期にある人々の伝道（カウンセリング）の急ぎ過ぎは、一時的現象であるかもしれないが、抵抗や反抗を生じさせることが多い。この場合、その人の従来の意味（価値）体系が未だに存在しており、感情的にも、他に何かを緊急に求めなければならないという状態にはないからである。そういう意味では、この段階のカウンセリングは、カウンセラーにとっては、聞くことが、語ることに大きく優先することが、カウンセリングの効果の前提となる段階であると考えられる。そして、語ることは、来談者の関心や要求（ニード）に適切に答えるものでなければならない。たとえ伝道熱心と言っても、語り過ぎ（しゃべり過ぎ）は、見当はずれの部分が多く、また、警戒心を生じさせ、固い

心、閉ざされた心にしてしまう危険が非常に大きいことを忘れてはならない。聖霊の働きの妨げとさえなりかねない場合もある。

(二)第二段階(葛藤期)におけるカウンセリングも伝道カウンセリングと言える。

この段階においては、来談者は、意識的にキリスト教との葛藤をしているのである。そして、その葛藤は、明白な求道である場合もあるし、信仰に対しては否定的な態度で葛藤状態にある場合もある。危機体験的な状況の中にあるため、カウンセラーは、感情的には昂奮していることが多い来談者のカウンセリングは十分な配慮の中になされねばならない。

この段階におけるカウンセリングの目的は、来談者の葛藤がキリスト教に対して否定的なものから肯定的なものへと変わり、内容的には、「罪を認め、それを悔い改めて、福音を信仰によって受け入れる」助けをすることである。

この場合も、カウンセラーの独断の先行、語り過ぎは十分に注意されなければならない。しかし、そればかりではなく、むしろ、重大な価値転換をしようと苦悩している求道者には、キリスト教の偉大な価値(内容)を、十分に提示、提供することが、極めて大切な時期である。まさに、伝道の最も重大な局面にかかわっている時期であると言える。

ややもすれば、罪の指摘のみを強調しやすいのであるが、それだけであれば、来談者は批判され、叱責されているとしか思えないし、どうしたらよいか分らないのである。福音のすばらしさと豊かさが、十分に提示されなければ、何を、どのように信じ、その結果どうなるのかを知ることができないのであるから、「入信」するすべがないのである。

る。主イエスは「時が満ち、神の国は近くなった。悔い改めて、福音を信じなさい」と言われたのである。

(三)最後に、第三段階(信仰生活期)のカウンセリングについて考えるわけであるが、狭義の教会カウンセリングの成立する時期であるとも言える。

J・E・アダムスも、「実は、カウンセリングが真にヌーセティックになるのは、カウンセラーがクリスチャンであるときである」と述べている^④。

先にも述べたように、パウロがコロサイの教会の人々のために祈った祈りを、著者の教会カウンセリングの神学的枠組の準拠としたのであるが、その祈りは、信徒のためであった。

この段階におけるカウンセリングの目的は信徒の望ましい成長ということである。そして、その領域も局面もまことに多種多様であり、無限にあると言わなければならない。そういう中から、あえていくつかの主要な点について触れたいと思う。

全体的に要約すれば、それは、信仰の拡大化、信仰の分化、信仰の深化、および、信仰の強化の妨げとなっている問題や要因を取り上げ、解決して行くことである。そして、あらゆる問題や契機(モメント)をして、その個人の信仰的、霊的、実質的成長に有用たらしめることである。

これらの過程の妨げとなっている現象の中には拡大も分化も深化も妨げる「固着」があり、深化をある程度促進しても、やはり拡大を妨げる「偏向」がある。そして、その原因はまことに多種多様で、その取り扱いにおいてはどうしても心理学的あるいは精神医学的方法の助力を必要とするもの(または領域、点など)があると考えられる。特に問題

が教理的性格のものではなく、情緒的な性格の場合はそうである。

以上、回心過程に対応すると考えられる段階ごとに、その主要な現象（体験のあらわれ）の記述とその中でのカウンセリングの方法についての体系化を試みて来た。今なお概括的な域を出ていない不十分なものでしかないが、今後、これに基づいて具体的な展開を進めて行きたいと考えている。御批判、御指導を賜りたいと切望するものである。最後に、一つの聖句をもって結びたいと思う。「これらの務めに心を砕き、しっかりとやりなさい。そうすれば、あなたの進歩はすべての人に明らかになるでしょう。自分自身にも、教える事にも、よく気をつけなさい。あくまでそれを続けなさい。そうすれば、自分自身をも、あなたの教えを聞く人たちをも救うこととなります」（1テモテ四・15、16）。

注

- ① 拙著『牧会カウンセリングの聖書の基礎』『福音主義神学』、福音主義神学会、一九七二、八五頁以下
- ② 沢田慶輔編著『相談心理学』誠信書房、一九五七。標準的テキストと言える。四八頁
- ③ 沢田編著、前掲書七七頁
- ④ C・M・ナラモア著、拙訳『キリスト教カウンセリング』いのちのことは社、一九七五、六二頁
- ⑤ J・E・アダムス著、柿谷正期ほか訳『新しいカウンセリングのマプローチ』いのちのことは社、一九七八
- ⑥ J.E. Adams: *Shepherding God's Flock*, 2: "Pastoral Counseling," Michigan, 1975, p. 21.
- ⑦ L.J. Crab, Jr. "Basic Principles of Biblical Counseling," Michigan, 1975, p. 47.

⑧ 拙著『宗教意識および体験の形成と発展——特に意味づけを中心として——』（東北大学文学部心理学、修士学位論文、一九六五、部分的に心理学関係の諸学会にて発表）

⑨ Robert O. Ferm, *The Psychology of Christian Conversion*. London: ユリー・グラントム師の紹介のほどはがらうらる。p. 182.

⑩ H・ジェーコブス『キリスト教教義学』鍋谷堯爾訳編、聖文舎、一九七〇、二二四頁

⑪ J・E・アダムス『前掲書』一三五頁

（秋田ルーテル同胞神学校校長）